

## 円爾における禪と密の関係

本報告では、円爾の思想構造を問題にすることで、禪と密教との関係を検討する。円爾は、密教を阿字門とし、顕教より高く評価する。この阿字門は、万法の根源として、一切の諸法を出生するが、円爾はこの阿字に字相と字義の二面を見る。阿字の字相とは諸法がそれぞれの差別相を以て展開するその最初のあり方で、阿字の字義とはその阿字の字相を成り立たしめる場のようなものと考えられる。そして密教の究極はこの阿字の字義を知ることにあるとする。ここよりすれば、円爾の密教理解は、禪を一切の根本とする彼の禪の立場と共通するかのような印象を受ける。

だが、円爾は、密教たる阿字門を阿字という具体的な「文字」を用いる「教門」とし、その教門、すなわち阿字

の字義のさらに根底に不立文字・直指人心の禪の立場を位置付けて、両者を対置することなく、価値的に区別する。彼の言う禪は、いわば一切の言語化を成り立たせる根本である。一方教門は根底たる禪の具体的あらわれ、あるいは禪の境地を対象化して言語化したものである。この結果、禪に第一の価値が置かれ、密教を初めとする教門はその展開としての二次的な価値を有することになる。このことは、円爾にとつて、教理上の意味だけでなく、修道上の意味も持っていた。彼は、仏道修行は密教でも禪でもよいと言っているのではなく、密教の行法を行ずる前に、禪門によつて悟りを開くことを第一としたのである。このように両者の違いが立てられている以上、円爾の思想は従来言われて

島田 健太郎

きた様な教禪一致ではないと考えられる。

このような円爾の諸宗と禪の關係付けの背景には、諸宗がそれぞれの正当性を主張して一種の混乱状態にあった、当時の仏教界の現状が考えられる。このような中で円爾は、禪を、教と対置させず、教の根源として關係付けて、当時の仏教界の混乱に終止符を打とうとした。そして同時に、禪に第一の価値を置き、禪の立場である仏心宗を教門である諸宗と明確に区別して、自己の立場を諸宗より高く評価したのである。

このような文脈で考えた時、円爾が鎌倉期の思想界に果たした役割は、もう一度検討されてもよいのではないかと考えられる。

(学習院大学非常勤講師)